

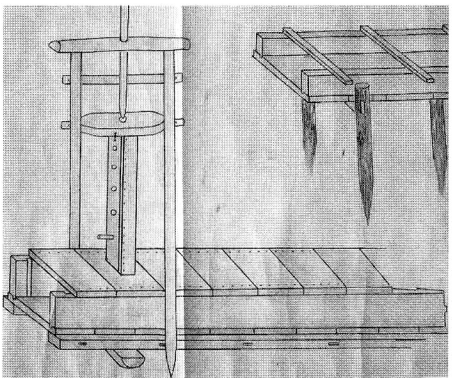
十四、旧尾仲村西浦池掛用水路への 水取り出し口の構造

若杉山と米の山に降った雨は随所に谷川となり、あい集まり時には滝となり、流れ下って若杉川になります。江戸時代に若杉川の水は旧若杉村、旧尾仲村、旧乙犬村の水田をうるおし、余水は新大間池に導かれ、現在の粕屋町、須恵町、福岡市の灌漑水となっていました。この若杉川から新大間池までの水路の建設は文化十二年(一八一五)から文政四年(一八二二)までかかりました。この後天保二年(一八三〇)に日高仁太夫満則がこの用水路の全工程図と水取り出し口、水門、井堰など水利施設の詳細な見取り図を描いています。

この絵図の池に奇妙な構造物が描かれています。西浦池には一つ(図①)、新大間池には二つ、駕与丁池には三つ描かれています。この記号のようなものは池の水を水路に流す水取り出し口なのです。この実

図(二間ものを八枚打っています。(『文化十年御免用普請軸帳、尾仲村』)

池の土手の下部は十六間ありますので、長い木箱(井樋)を土手の下に通し、池の水を水路に落すようにしています。したがって土手の外に出ている箱の口は開いたままで、池の水が水路に流れ出るようになっており、反対側は板を打っています。この池の中



(図②) 西浦池水取り出し口

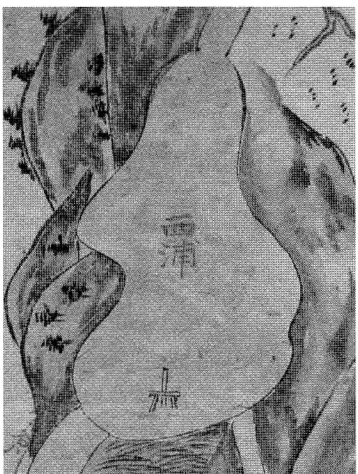
差し込んでいる棒柱)を引き抜きますと、縦箱の水面からこの小栓までの深さの水が流れ込みます。

後はこれと同じように次々と小栓を抜きます。

最後に四角い縦箱自体を引き抜きますと、池の水のほとんどは水路に出ます。なお材木はすべて松材で、板は二五寸の厚さ、横箱の内径は横(上と下)一尺一寸二歩(三十四寸)、縦(両側)が一尺二寸あることが『御免用普請軸帳』に書いてあります。また「松木二本、長三間、末口七寸、柱木」という記述から西浦池が満水した時の水深はおそらく三以上あったとも思われます。

この取り出し口がいつ、どこで、誰によって発明されたのか不明ですが、おそくとも一八〇〇年以前から使われていたものと思われれます。その後明治期、大正期を経て、西浦池は一九六〇年ごろまで、浦田池(尾仲村)、三段池(乙犬村)は一九七五年ごろまで使われていたようです。

松材と鉄釘と大工の技術でこれほど優れた装置が使われていたこと、環境に優しいものだったことに



(図①) 西浦池と水取り出し口(日高仁太夫満則が天保二年に描いた絵図より)

際の構造は図②に示したようになっていました。図②を説明しますと、板や柱はすべて松材が使われています。

下部の横長の箱(井樋)を池の底と箱の上面が同じになるように埋めます。箱は側面を長さ二間一尺(三九寸)、幅一尺二寸(三六寸)、厚さ二寸五歩(七五寸)の松板が八枚打たれており、上と底には幅一尺六寸二歩(四十九寸)の板が十六間(二十八八

にある約二十九段の箱の上に四角い穴を穿ち、そこに四角い縦長の木箱をはめ込みます。この縦に長い箱は取り外しが可能です。縦長の箱には等間隔に四つから六つの丸い穴が穿ってあり、箱の上にも丸い穴がありそれらの穴は棒柱、小栓がはめられています。(図②)

前記『御免用普請軸帳』には水取り出し口の図はないため、日高仁太夫満則が描いた図を掲載しましたが、小栓の数がわかりませんし、横長の箱の縦横の比率も図と合いません。その点はご容赦願います。ではどのようにして池の水を水路に、そして水田にまで入れていたのでしょうか。

田植え前には池は満々と水をたたえ、一番上の長い棒柱と二本の支柱だけが池の上に見えています。代かきのため田に水を入れる時、村人は泳いで行き縦棒柱を抜き取り、水はドウドウと縦箱から横箱を通って水路に流れ込み、各水田へと流れて行きます。池の水面が縦箱の上の面まで下がりますと、水は箱に流れ込みません。そこで一番上の小栓(横に

感心し、昔の人の知恵に敬意を表します。

写真提供 粕屋町立歴史資料館

篠栗町文化財専門委員
篠栗古文書会

武藤 軍一郎